

金毘羅大権現より北へ半里(二キロ)の菟川の土提に、その春は笹に

花が咲き、実がなつた。

「何ぞ不吉なことがあるぞ、

六十年に一度咲くという笹に花がさいた」

と里人たちが噂していると、そ

れが不幸の前ぶれであつたかのよ

うに、六月から七月にかけて大雨が

降り、田畑や家が流された。

そして、笹の葉が一斉に枯れた、

寛文十年(一六七〇)十一月

十一日、金毘羅大権現の社人、玉尾

松太夫の一族十三名が、金毘羅の

町中を引廻しうえ、処刑されるこ

とになった。

当時、江戸の引廻しでも、行列の

人数は二十五名に限られていたが、

松太夫一族の引廻しは、何故か総勢

六十余名の大行列であつた。まず

足軽十名の先払いに続いて、朱槍

三名、次に松太夫一族が足軽兩名

に守られて進み、籠守、ひねり、

鉄砲組が続いた。

高松藩町奉行与力朝倉十左衛門

は馬で、道具持、馬口取、草履取各々

一名を従え、同じく与力柴坂金

兵衛は、足軽頭の斉藤勘右衛門ら

二十名、同じく足軽頭篠原市左

衛門も、輩下二十名を従え、最後は

横目吉田又八が続いた。

近在から見物人も多かつた。時刻

は日暮れに近く、晩秋の風は肌を

刺すように冷たかつた。

「あのお優しい松太夫様や、ご一族

がなぜ処刑されるのだろう」

「金光院を幕府に訴えたからだそ

うだ、しかしこの行列の物々しさ

はただごとではないぞ」

「松太夫様とご内儀はお預中、

食を断つて死なれたそうなの

「それでお見えにならぬのか、ほん

近在の女房たちは、ささやきあ

つて涙をこぼした。

「おい、あれを見よ」

百姓たちの視線は、内記の俵

七之助(五才)と、権九郎(三才)

が、二人一緒にしぼられている馬の

背にそそがれた。

「あの和子様だけでも助けたいの

う」

老婆が、鼻水をすすりあげた。

「和子様の母様は、高松藩の牢屋で、

男の子を産まれたが、その子がく

びり殺されると、自分も舌を噛みき

つて、果てられたそうなの

「あの花のように美しいお人がな

あ」

「高松藩では幕府へ訴え出られ

面目がたたぬと怒つて勝つため

老中とやらへ、大金を運んだと

いうぞ」

「桑原、桑原、そんな話はやめて

おけ、お上の耳に入るとうるさいこ

とになる」

「人の口に戸はたてられぬ。宥典殿

と一緒に江戸へ行った供侍が、酒

に酔うて話したそうなの、地獄の沙汰

も金次第とな」

たとたしかにいうたぞ」

噂は風のように見物人の間に

なが
流れていった。

当日処刑されたのは内記 権太夫、

内記の 伴 七之助と 権九郎、

三右衛門とその 伴 伊之助、

五郎右衛門、 両名の 伴である

理兵衛、吉右衛門、松右衛門、吉兵衛

と下僕の長吉、六助の十三名であ

る。

七之助と権九郎は白羽二重の 袷

で髪はみずらに結んでいたが、その

気高さは安徳帝の再来かと人々を

驚かせた。

「童なれば先に」

という内記の願により、二人の

童は一番に処刑と決まった。内記

がよくいい聞かせたとみえ、童な

がらも毅然として、礼儀正しく首の

座につき、

「父上様、皆様ごきげんよう」

と挨拶をした。さすがに不憫と思

つた内記は声をしめらせ、

「父の最後の講義を聞きながら、母

の待つ国へ参られよ」

と日本書紀の神代巻を講じ始め

た。

幼い兄弟は、父をかえりみて

かすかにほほえみ、父の声に和して

日本書紀を誦していたが、一瞬

白刃がひらめいて、小さな首が河原

へ転々と転がった。

群集は一瞬かたずをのみ眼を

とじた。

やがてどこからともなく、

「人非人！」

「人でなし！」

の音が湧き起り、竹矢来の彼方か

ら小石が雨か霰の如く降りそそ

ぎ、警護の足軽たちは石つぶてに眼

を打たれ、よろめいて倒れた。

朝倉十左衛門は馬上から、

「かまえ！撃て！撃て！」

と狂気のように叱咤した。

あわてた鉄砲隊は、群集に向け

て鉄砲を撃ち放った。

群集は不意をうたれて、どよめ

きの声をあげつつ退いたが、石つ

ぶてはなおも続いた。

「己れら！叩き斬るぞ」

怒った朝倉十左衛門は竹矢来の

彼方へ怒声をあびせた。

その間に、内記の声に和して、

日本書紀を誦していた一族の者は

次々処刑された。

最後に残った内記と権太夫に、

朝倉十左衛門が、

「申したきことあれば申せ」

という、内記は青ざめた顔をき

つとあげ、

「われいまだ非もなき社人の死罪

になりたるを聞かず、天人ともに

許さざる高松藩主のこの所業、

神々とくご高覧あれ」

と叫ぶや、自ら舌を噛みきって果

てた。

権太夫は朝倉十左衛門をはった

とにらみすえ、

「高松藩主にしかと伝えよ。わが

怨念のほど思い知らせてやるとな」

と叫んだ。その表情のすさまじ

さに、朝倉十左衛門はたじろいだが、

気をとりに直して負けじとばかり

大声をはりあげて、

「黙れ、痴れ者、大恩ある金光院殿

を訴えたる人非人めが！」

叱咤する朝倉十左衛門を尻目に、

権太夫は狂ったように叫び続けて

息が絶えた。

内記と権太夫の首は戌の刻、獄門

にかけられた。その頃から篠つくよ

うな大雨となり、季節はずれの雷鳴

が轟き、人々をおびえさせた。

高松藩の足軽たちが、大雨を機に

ひきあげると、夜陰にまぎれて難民

たちがしのびより松太夫一族の

供養をした。屍体はそのまま打捨て

てあったが、十三人は優しく語り

かけるように、より添って死んでい

た。そして、その夜、彼らの魂が火

の玉となつて祖谷にとび、まばゆい

ばかりに輝いたと古老たちはいい

伝えている。

その夜のことである。激しい雨が

あがると月も星影もない菟川橋の

あたりは、墨を流したような闇に

つつまれていた。

高松藩町奉行与力朝倉十左衛門

は、無事処刑を終えた報告に、

金光院におもむき、清め酒を振舞わ

れて、馬で金光院を出たのは深更で

あった。

四名の供廻りと、菟川橋にさし

かかる、先方から弧火のように、

ぼうと霞んだ行列の灯が近づいて

きた。

供廻りは、四つ目印しの

弓張提灯を高くかかげた。こちら

の身分を知らせるためであった。

その一瞬、一陣の風が通りぬけ、

弧火はふつと消えた。

「うむ」

十左衛門は低くうめくと落馬し、

意識を失った。身体はどこにも傷

はなかつたが、意識はもどらず、

「病死」

として伴に家督はうけつがれた

が、人々は、

「松太夫、権太夫のあたり」

と噂した。

その翌年の秋のことである。

高松藩社奉行間宮九郎左衛門は、

金毘羅の「紅葉祭」に招かれて、思

わず時を過し、帰途についたのは

日暮れであった。供廻りの者は、

「日が暮れると、菟川には弧火が

ともるといふぞ、急がねば」

とささやきあつて道を急いだ。

菟川橋に近づくと、橋の上では

白衣の二団が、団扇太鼓を叩いて、

松太夫一族の霊を弔っているよう

であった。

間宮九郎左衛門が橋にさしか

かると、団扇太鼓の音が一段と激し

くなつた。

馬が太鼓の音におびえたのか進

まなくなつた。

「そのけ！邪魔だ！」

間宮は叱咤したが、白衣の二団は

聞えぬ風で、百雷の轟きにも似た

音をたて続けた。

その時である。被川橋の彼方に、
点々と弧火が広がり、そこに朦朧た
る人の姿が浮かんだ、それは
十三人の社人のおどろな姿であ
った。

「あつ……」

間宮の体が馬上で大きくかしい
だ。

「旦那様」

馬口取りが、間宮の体を支えた。
間宮がわれにかえると弧火は消え、
見なれた雑木林が黒々と続いてい
た。

自宅に辿りついた間宮はそのま
ま床につき、まもなく世を去った。

高松藩主松平頼重は、信仰心が
厚く生涯に十八回金毘羅に参詣
し、藩士にも参詣を奨励したが、

この事件のあと、高松藩士が被川

橋にさしかかると、弧火が見えたり、
妖星がとぶなど異変が度重なつて
起きたので、寛文十一年

(一六七一)の秋、この橋を

「お止橋」

として橋を渡らず、迂回するよう

下知した。

里人も、

被川には夜目が光る。

松太、権太の目が光る。

と恐れ、俚謡にまで歌われて、夜

はこの橋を誰も通らなくなった。

それから約二百年後の文久三年

(一八六三)十月、高松藩で

は被川橋より迂回する不便に耐え

かねて、松太夫一族処刑の地に、

「松田宮」

という石の祠二つと一基の

宝篋印塔を建てて供養したところ、

以後は高松藩士が被川橋を渡つて

も何のさわりもなくなったという

ことである。

(以上11月19日放送分)